

## わが兵法のままに — 宮本武蔵 —

関ヶ原の合戦（一六〇〇年）から四年後、武蔵は京にいた。一番強い兵法者を打ち破り、名を上げるためである。

武蔵が倒そうとした吉岡家は、京に「室町兵法所」を構えていた。代々、足利將軍家の剣法師範役を務めてきた名門である。武蔵は、吉岡家の当主清十郎に果たし状を突きつけた。

「こやつたくらの企みは見え透いいておる。吉岡に挑いんで名を上げたいという、ただそれだけのことだ。」

清十郎は放っておきたかったが、挑戦に応じなければそれを都中に知らせると、果たし状には書いてあった。清十郎が受けて立たざるを得ないよう、武蔵は仕掛けていたのである。

数人の門弟もんていを従えて、清十郎は夜明け前に京の北の外れ、蓮台寺野れんたいじのにやってきた。

「武蔵は、まだ現れぬか。」清十郎はいらだっていた。

「臆病風に吹かれたのかも知れません。」

門弟が気休めを言ったとき、草むらからいきなり、武蔵が現れた。不意を突いた武蔵の出現に、清十郎は心を乱され、表情にもそれが表れた。木刀を構えた清十郎に対し、武蔵は、長めの木刀を提さげたまま、清十郎との距離を一気に詰めた。清十郎の技も性格も事前に調べていた武蔵は、落ち着き、大胆に攻め、勝つために万全を期きした。そしてもうひとつ、なんとしても一番強い兵法者を倒すのだという武蔵の気迫が、勝負を決めた。

武蔵は清十郎の申し分のない突きをかわし、飛び上がりざまに木刀を振り下ろした。その一撃で、清十郎は倒れた。

慌あわてふためく門弟たちを尻目に、武蔵は素早く立ち去った。大胆にして細心、武蔵の完勝である。武蔵は兵法の天才であつた。

兵法：古代中国で発達した戦闘に関する学問で、『孫子』『呉子』『司馬法』などの書がその代表。

師範役：武道・芸道・学問の指導者。

門弟：弟子。

蓮台寺野：京都府京都市北区紫野十二坊町辺り

武蔵は、十三歳で新当流の兵法者・有馬喜兵衛と初めて勝負をし、これに打ち勝つと村を飛び出した。武芸の力を伸ばし、天下に名を上げ、ゆくゆくは侍大将に、さらには一国の大名になることを夢見て、武者修行の旅に出たのであった。諸国を巡って、いろいろな流派の兵法者と六十数回の勝負を行ったが、一度も敗れていないという。そして、武蔵は慶長十三（一六一二）年、巖流島での佐々木小次郎との一戦によって、名声を天下に鳴り響かせた。まさに兵法者として名を上げたのである。しかしながら武蔵は、戦いを重ねる中で、これまでの自分の人生に疑問を感じ始めていた。試合には勝ち続けていたが心に満足感はなく、ただむなしさだけが残るようになっていた。

「わたしは、ただ目の前の強い相手に勝つことだけを考えてきた。はたして、これでよかったのだろうか。まだまだ、修行を積まなければならない。剣の修行とは自分との戦いなのだ。もっと心を磨かなければ。」

武蔵は、髪を伸ばし身なりも気にせず、ただ「自分の生き方とは何か」、「人生とは何か」を深く考えるようになった。「今までは他の兵法者と比べて、その強い相手に勝って世に認められることこそが自分の生き方だと考えていた。しかし、本当の兵法とは、自分と向き合い、自分の姿をありのままに受け入れ、自分のあるべき姿を求めてひたすら努力することではないのか。」

武蔵は、戦うための兵法ではなく、兵法を通して人生を極める道を探し始めた。自分の生き方を振り返り、心の迷いを捨て、ひたすら自分の道を求めるようになったのである。

寛永十四（一六三七）年のある時、武蔵は、熊本城主細川忠利に招かれることになった。家臣として召し抱えたいというのである。今や熊本の大大名になった細川家が、年老いた自分を迎えてくれるというだけでうれしかった。武蔵

新当流：剣術の流派の一つ。

巖流島（船島）：山口県彦島東岸の離れ島。



佐々木小次郎：生没不詳。福井県今立町で生まれたという説が強い。

細川忠利：江戸時代前期の大名。豊前國小倉藩の代藩主、肥後国熊本藩初代藩主。

は五十歳を過ぎてようやく、落ち着きの場所を得ることができたのである。

「これからは、兵法から学んだものを細川家のために役立てたい。」

武蔵は藩主忠利のもとを訪れては、兵法の話だけでなく、絵や茶道、禅について話すようになった。

「武蔵よ、一つ私に達磨を描いてくれぬか。」

武蔵は忠利から頼まれた達磨の絵を、描いてはみたがなかなかうまく描けなかった。描いては破り、再び描いては破りながら、何日も悩み続けた。武蔵はこの世で最高の達磨を描いて忠利に献上したいと強く思っていた。

眠れぬ日々が続いた武蔵は、床に入ってふと、以前の勝つことだけにこだわっていた頃の自分を振り返った。

「ただうまく描くことを考えるのではなく、わが兵法のままに、心のままに描くことが大事なのだ。」

夜半過ぎ、突然起き上がった武蔵は、灯をともし紙を出し、一気に達磨を描き筆をおいた。武蔵は描きあがった達磨を観た。半眼に開いた達磨の目が、八方をにらみまわしているようだった。

「わしの絵は、兵法に遠く及ばない……と思っていたが……。」

廊下にいた一番弟子の求馬之助は、やがて食い入るように達磨に見入った。達磨が生きているかのように求馬之助をにらんでいる。求馬之助は思わず達磨から目をそらした。恐ろしいまでの絵であると、求馬之助は感じたのであった。

「わかったぞ、求馬之助。始めは忠利様の仰せであり、何としてもうまく描かねばと思う心から、かえって筆の伸びがなく、達磨にはほど遠いものであった。だが昨夜は、わが兵法のままに、心のままに描けたのだ。」

禅：古くからインドで行われる修行方法で、精神を一つの対象に集中し、その真の姿を知ろうとすること。

達磨：中国の僧で、九年間壁に面して座り続け、人間とは何かを自分に問い続けた末、悟りを開いたと伝えられている。

求馬之助は、武蔵の言っている意味が分かったような気がした。

「日が昇ったら城に行く。供をせよ。」

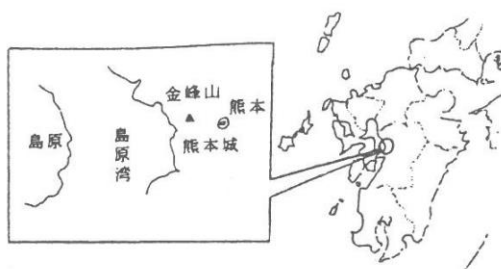
寛永二十(一六四三)年、武蔵は六十歳になっていた。自分の命はもう長くはないと悟った武蔵は、れいがんどう靈巖洞と呼ばれるどうけつ洞穴にこもって、これまで考え続け実践を通して体得してきた自らの兵法をまとめた「ごりんのしょ五輪書」を書いていた。「兵法の道、二天一流と号し…」と、洞窟の冷気を感じ、ロウソクの芯の燃える音を聴きながら筆を走らせていた。書き終わり筆を置くと、武蔵は静かに目をつぶった。



宮本武蔵の略年譜

- |      |                         |      |              |
|------|-------------------------|------|--------------|
| 一五八四 | 英田郡大原町(現在の美作市大原町)に生まれる。 | 一六三七 | 島原の乱に出陣。     |
| 一五九六 | 初の決闘。兵法者有馬喜兵衛に勝つ。       | 一六四三 | 『五輪書』を書き始める。 |
| 一六〇〇 | 関ヶ原の合戦に出陣。              | 一六四五 | 六十二歳で没する。    |
| 一六一二 | 巖流島(船島)で、佐々木小次郎との決闘。    |      |              |

靈巖洞…熊本市の西部にある金峰山のふもと。



五輪書…兵法書。地・水・火・風・空の五巻にまとめられている。

1 主題名 充実した生き方を求めて [A 向上心、個性の伸長]

2 ねらい

充実した生き方をする上で大切な気持ちを考える中で、よりよい自己を目指して前向きに努力しようとする気持ちの大切さに気づき、自己を見つめ自己の向上を図ろうとする態度を養う。

3 主題設定の理由

(1) 内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、A 向上心、個性の伸長「自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること」である。

自分を静かに見つめ直すことは、自己の向上を願って生きていく上で重要なことである。自己を見つめる中で、向上心が起こるのである。この時思い描く自己像は、自他の行為における関係の中で意識されるものである。自己という概念は、他者との関係において、初めて規定されるともいえる。

第2学年では、自己を見つめることを通してよりよい生き方について、自らを向上させようとする態度を養っていききたい。

(2) 生徒の実態について

本学級の生徒は、授業や学校行事に積極的に取り組む生徒が多く、ペア活動やグループ活動といった協働的な学びにも意欲的である。しかし、個々の生徒を観察すると、自分自身が活躍でき、達成感を感じているものの、何か物足りなさを感じたり、思うように成果が出ずに行き詰まったりしている生徒もいる。

そこで、充実した生き方をするためには、現状に満足せずに自己を振り返りながら、挫折や失敗を乗り越えて成長させていこうとする態度が大切であることや、自己を成長させることが幸福感や自信をもたらす、自分自身の人生や人間関係を豊かにすることに気付かせたい。

(3) 教材について

本教材は、『五輪書』という兵法の書を書いた宮本武蔵が「人生いかに生きるべきか」を考える際の心の葛藤を描いたものである。勝つことだけにとらわれていた自分に虚しさを感じ、自己を見つめ自己のあるべき姿を求め続けた武蔵の生き方を通して、よりよい自己を目指して前向きに努力しようとする気持ちの大切さに気づかせたい。

4 板書例

めあて  
充実した生き方とはどんな生き方なのか考えよう。

わが兵法のままに 宮本武蔵

宮本武蔵像

○自分の人生に疑問を感じ始めていた時の武蔵の気持ち

・ 名を上げるためには勝つことが大切。  
・ 下調べをしっかりとって相手の隙をつこう。

《意図》  
・ なせむなしさを感じるのか。  
・ どうすれば満足感を得られるのか。  
・ 戦いに勝つことだけが人生のすべてなのだろうか。

《反省》  
・ 今までは強い相手に勝つことだけを考えていた。  
・ 勝敗にけいこたわらず真の強さを求めなければならぬ。  
・ 相手に勝つことだけで武藝を究めることはできない。

《決意》  
・ 物事を冷静にとらえて正々堂々と戦うべきだ。  
・ 心に迷いがなく心が大切だ。  
・ 心を磨き心を鍛え人間として大きく成長しよう。

グループの意見	グループの意見
グループの意見	グループの意見

○最高の達磨を描き上げた時の武蔵の気持ち

・ これまで自分が培ってきた兵法が生きている。  
・ 何事にも動じず心のまま描くことが大切だ。

●充実した生き方にするために  
よりよい自己を目指して努力しようという気持ちがあったかどうか振り返ってみよう。  
修行によってたどりついた宮本武蔵の思い  
「万理一空」の理について

5 他の教育活動との関連

体育科 (剣道)

6 学習指導過程

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の注意点
<p>1 充実した生き方について考え、本時のめあてをつかむ。</p>	<p>○ 充実した生き方とはどんな生き方だと思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>好きなことや楽しいことをたくさんする。</li> <li>仲の良い友達と多くの時間を過ごす。</li> <li>部活の大会で勝って優勝する。</li> <li>自分の目標に向かってチャレンジする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人ひとりの受け止め方の違いをもとに、楽しいことだけが充実した生き方ではないことから学習課題へ繋ぐようにする。</li> </ul>
<p>充実した生き方をするために大切な気持ちを考えよう。</p>		
<p>2 教材「わが兵法のままに」を読んで話し合う。</p> <p>(1) 吉岡家に戦いを挑んでいた頃の武蔵の気持ち</p> <p>(2) 自分の人生に疑問を感じ始めていた頃の武蔵の気持ち</p> <p>(3) 最高の達磨を描き上げた時の武蔵の気持ち</p> <p>3 充実した生き方について、これまでの自分を振り返る。</p> <p>4 まとめをする。</p>	<p>○ 吉岡家に戦いを挑んでいた頃の武蔵の兵法は、どんなものだったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>名を上げるには勝つことが大切だ。</li> <li>どんな手を使ってもよいから勝てる方法を考えよう。</li> <li>下調べをしっかりと相手の隙をつこう。</li> </ul> <p>◎ 兵法者として名を上げたにも関わらず自分の人生に疑問を感じ始めていた頃の武蔵は、どんなことを考えていたのだろうか。</p> <p>〔疑問〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>勝ち続けているのになぜむなしさを感じるのだろうか。</li> <li>どうすれば満足感を得られるのだろうか。</li> <li>戦いに勝つことだけが人生のすべてなのだろうか。</li> </ul> <p>〔反省〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>今までは強い相手に勝つことだけを考えていた。</li> <li>勝敗だけにこだわるのではなく真の強さを求めなければならぬ。</li> <li>いろいろな手を使って勝っても満足しないのは、心が抜けているからだ。</li> <li>相手に勝つだけで武芸を究めることはできない。</li> </ul> <p>〔決意〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>物事を冷静にとらえて正々堂々と戦うべきだ。</li> <li>鍛錬をきわめて心に迷いのないことが大切だ。</li> <li>心を磨き心を鍛え人間として大きく成長しよう。</li> </ul> <p>○ 最高の達磨を描き上げることで、武蔵は何に気付いたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>これまで自分が培ってきた兵法がこの絵の中に生きている。</li> <li>何事にも動じず心のままに描くことが大切だ。</li> </ul> <p>○ 充実した生き方をするために、よりよい自分を目指して努力しようという気持ちが心の中にどれだけあったか振り返ってみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>もっと自分を高めたいという気持ちはあったが努力が足りなかった。</li> <li>よりよい自分になれるよう、少しずつだけど努力している。</li> </ul> <p>○ 修行によってたどりついた宮本武蔵の思いについて紹介する。(向上心と関連させて)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>宮本武蔵の功績について触れておく。</li> <li>手段を選ばず敵に勝つことだけに価値を見出していた気持ちを押さえておく。</li> <li>ワークシートに書いた自分の考えを元にグループで話し合うようにする。</li> <li>話し合ったことをホワイトボード等を使って全体の場に出し合わせ、揺れ動く多様な気持ちを受け止めることができるようにする。</li> <li>悩んだ末に何を見出すことができたのか考えることで、心を磨き人間として成長しようとする気持ちの大切さを意識できるようにする。</li> <li>自分の心の中にある将来に向かって自らを向上させようとする気持ちを意識できるようにする。</li> <li>『兵法三十五ヶ条』の中の「万理一空」を提示し、実践への意欲につなげる。</li> </ul>
<p>評価の視点</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループや全体での話し合いを通して多様な考えを出し合い、よりよい自己を目指して前向きに努力しようとする気持ちの大切さに気付くことができたか。</li> <li>自分を振り返り、自己を見つめ自己の向上に向けて努力しようとする意欲を高めることができたか。</li> </ul>	

## 7 参考資料

### (1) 宮本武蔵について

#### (ア) 謎に包まれた人

武蔵のありのままの姿はあまり知られておらず、小説「宮本武蔵」を書いた吉川英治も「武蔵について分かっていることを漢字の文でつづいたら、百字で足りてしまうだろう。」と述べたとされている。実際、確かな資料が少ない人物であり、武蔵の生涯について確実に知られているのは晩年の数年間のみで、両親のことさえ謎に包まれている。

#### (イ) 武蔵の生涯

少年時代には姉や兄と離れ、孤児のような状況であった武蔵は、寺に預けられた。このことが独立心を早く目覚めさせたとも考えられている。武蔵の生涯は、佐々木小次郎と巖流島で決闘するまでの青年期、諸国をさすらって回った壮年期、そして熊本で静かに暮らした晩年期に分けられる。武芸によって名声を得た武蔵は、壮年期から晩年期にかけて、自分自身の人生について深く考えるようになった。

### (2) 『五輪書』について

この書は、武蔵が二天一流と称する兵法の道について、寛永20（1643）年10月上旬から正保2（1645）年5月12日の間に書かれた。そして、この書を書き上げて7日後に宮本武蔵は亡くなっている。「五輪」とは、仏教による「宇宙を形成する五要素」のことであるとされている。

- 地<sup>ち</sup>之巻・・・基本的な心構えと考え（修行するということ）
- 水<sup>すい</sup>之巻・・・二天一流の剣法（基本的な動き・心構え）
- 火<sup>か</sup>之巻・・・戦うときの心構え（いかにして有利な状況を作るか）
- 風<sup>ふう</sup>之巻・・・他流との比較（基本の大切さ）
- 空<sup>くう</sup>之巻・・・修行を積んだ後の姿（自由自在な心技体）

### (3) 「万理一空」について

どんなに遙か遠くまでいっても空は一つであり、すべてのものは一つの世界に留まっているという意味。物事を冷静に捉え精神の修養、身体の鍛錬を究めること、掲げた一つの目標を見据え、絶えず努力を続けることの大切さを説いている。

### (4) 参考文献

- ・『宮本武蔵』 浜野卓也（ポプラ社文庫）
- ・『宮本武蔵』 小暮正夫（講談社 火の鳥伝記文庫）
- ・『剣聖武蔵伝』 菊池寛（未知谷）
- ・『宮本武蔵の「五輪書」』 童門 冬二（PHP）
- ・『五輪書』 宮本武蔵・渡辺 一郎校注（岩波文庫）

## 道徳科の授業を主体的・対話的で深い学びにしていけるために

### 1 主体的・対話的で深い学びとは

- 道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめる。 ⇒ 主体的な学び
- 物事を広い視野から多面的・多角的に考える。 ⇒ 対話的な学び
- 人間としての生き方についての考えを深める。 ⇒ 深い学び

参考〔第3章 特別の教科 道徳〕の「第1 目標」より

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

※ \_\_\_\_\_は筆者

### 2 主体的・対話的で深い学びにしていけるために

#### (1) 学習課題を明確にする

ア 道徳的価値に関わる問題とは

道徳的価値が実現されていない。 道徳的価値の理解が不十分  
心の弱さをどう乗り越えていくか。 どの価値を優先するか。 など

イ 道徳的価値に関わる問題を生徒の学習課題にしていけるために

- ・自分の経験や考え方を出し合う中で、各自の受け止め方の違いから課題意識へと高めていく。
- ・自分の経験や考え方と主人公の生き方との違いから課題意識へと高めていく。

#### (2) 中心発問で多面的・多角的に考えさせる

ア 多面的・多角的に考えるとは (例)

多面的思考…主として物事を多様な側面から学び合ってより深く本質を探ろうとする思考  
多角的思考…主として自分の考えを多角的に伸ばしていくことで見方や考え方を広げていく思考

※道徳で考えると、一人一人が道徳的価値(内容項目)に関わる多様な見方や考え方を出し合い、それを広げたり深めたりしながら、よりよい見方や考え方へと高めていくこと

イ 多面的・多角的に考えさせるための発問の構成

中心発問に焦点化して発問を構成する。

※道徳における中心発問とは、道徳的価値に関わる多様な見方や考え方を出し合いながら、それを広げたり深めたりすることでねらいに迫ることができる発問

ウ 多面的・多角的に考えさせるための活動の工夫

書く活動、話し合う活動、体験する活動等を行う中で、ワークシート、小黒板(ホワイトボード)、短冊カード、ICT機器、役割演技、ディベート等を活用する。

#### (3) 価値の大切さを自分のこととしてとらえさせる

ア 主人公の言動や気持ちの中から、大切な価値(見方や考え方)を見つけさせる。

イ 見つけた価値をもとにこれまでの生き方を振り返り、自分にとって大切なものとして価値を捉えさせる。

(文責 環太平洋大学 大野光二)